



## 2月のコラム ～昭和のおっさんの進化と存在価値～

テレビドラマのテーマには、時代が反映されます。深夜枠の「おっさんのパンツがなんだっていいじゃないか!」。主人公は、家族からは堅物と嫌われ、職場では「お茶は女性が入れた方が美味しい」「仕事は、根性! 粘り! 押しは強く!」等セクハラ、パワハラになりかねない言動の連続で部下からも敬遠されています。ある日、引きこもりの息子(高校生)の友人がゲイだとわかり・・・昭和のおっさんには理解しがたいLGBTQ、二次元LOVE、推し活、メンズブラという新常識に出会い、失敗を繰り返しながら毎回アップデートしていく物語。タイトルの意味は、第3話で主人公であるお父さんが、銭湯に行ったとき、周りのおじさん達のパンツが黄色、赤、カラフルな柄物と色も形も様々なのを見て、「そうだ! おっさんのパンツがどんなだって誰に迷惑をかけるわけなし、自分の好きでいいのと同じで、異性を好きになろうが同性を好きになろうかという人それぞれで良いのだ」と腑に落ちたときのエピソードで判明。息子は、お化粧やかわいい服や持ち物が好きなのですが、だからといって単純にトランスジェンダーかというところでもないらしいのです。周囲にもわからないけど、本人もわからない。思いこみや常識、先入観に囚われないことは本当に難しいと思います。

もうひとつ「不適切にもほどがある」というドラマ。こちらは、昭和の価値観バリバリの親父(高校教師)が令和にタイムスリップする物語。昭和の場面では、野球部員のお尻をバットで叩く、バスでも職場でも平気で煙草スパスパ。そんなコンプライアンス意識の低い“昭和のおじさん”ですから、令和の世界においてはバリバリの“不適切”発言が飛び出します。しかしそれが、パワハラになるのを恐れ、コンプラでがんじがらめにされて、本当に大事なことや本質を見失いかけている今の社会に考えるきっかけを与えることになるのです。まだ、第2話なのでこれからですが、時代が変わっても、変わらないものや変わって欲しくないものが浮き彫りになっていくのが楽しみです。

「部下を『バカ』と叱責する行為がパワハラに当たらないとされた裁判例」を紹介してくださった弁護士さんが、「中国では、パワハラはほぼない。なぜか? 従業員を育成、教育する気が最初からない為、仕事ができない従業員については、速やかに退職勧奨又は解雇してしまうから」と書かれていました。パワハラが起こる場面は、仕事を教えてあげよう、できるようになって欲しい、そんな思いがベースにあることが多いです。この弁護士さんの「バカと叱責する行為は好ましくないが、新人を教育する文化も尊重する必要がある」とのご意見に共感します。

両作品ともコメディタッチで気楽に楽しみながら気づきを得られます。興味のなさそうなおじさんにも視てもらいたいな～

2024年2月 水田かほる